

NEWSLETTER



特集：2025年春着任教員紹介 Part2

【8月号】夏期休暇になり、先生方の研究シーズン到来！

授業や試験が終わり、大学は夏期休暇を迎えました。日頃は教育や学生対応、校務で大忙しの先生方も、この期間は国内外へ研究出張に向かわれます。実り多い研究期間となりますように！
さて、ニュースレター8月号では、若手3名の先生方をご紹介します。

自己紹介

2025年4月にアジア太平洋学部助教として着任し、国際法の研究と教育を担当しております。着任前はイギリスのユニバーシティ・カレッジ・ロンドン法学研究科において博士論文の執筆に取り組んでいました。

山と海に囲まれた別府は大都会のロンドンとは対照的で、新たな暮らしを楽しんでいます。趣味は旅行ですが、別府の温泉巡りもしていきたいところです。



アジア太平洋学部
伊藤 慎也 助教

研究内容

国際法が規律する事柄は非常に幅広いですが、私は国際人権法と国際経済法を中心に研究しています。

博士論文では、国際人権法（社会権規約における食糧に対する権利）と国際経済法（世界貿易機関の農業協定）の関係という切り口から、世界飢餓問題について考察しました。その他、国連の持続可能な開発目標（SDGs）やビジネスと人権等についても、国際法の観点から分析を行ったことがあります。こうした研究成果は、ヨーロッパ国際法学会やアジア国際法学会等の国際学会において、積極的に発表を行ってきました。

メッセージ

APU学部生へ

日本屈指の国際性を誇るAPUにおいて、在学生のみなさんが世界で活躍するための基礎力を習得するのを期待すると同時に、その一助になれば幸いです。

APU大学院生へ

先行研究を踏まえた上で、APUにおける世界中からの教員や院生との活発な議論を通じて、独創的な研究を遂行することを期待しています。

APU志望受験生へ

APUは日本にいながらにして世界中の人々と毎日交流できる刺激的な空間です。あなたも加わってみませんか？

自己紹介

イタリア出身の私は、イギリスで学問の道を歩み始め、スコットランドのセント・アンドリュース大学で実験心理学と行動神経科学の博士号を取得しました。それ以来、日本でのポスドク研究職、マレーシア、キプロス、イギリス、オーストラリアでの教員職など、世界中でキャリアを積んできました。2025年、私は日本に戻り、APUに国際経営学部の准教授として着任しました。

仕事以外では、熱心なロードサイクリストであり、家族と過ごすことを楽しんでいます。



国際経営学部
AQUILI Luca 准教授

研究内容

私の主な研究は、脳の報酬系における主要な神経伝達物質であるドーパミンが、学習、意思決定、行動適応にどのように影響するかを解明することです。薬理的介入、非侵襲性脳刺激（tDCS：経頭蓋直流電気刺激）、強化学習に基づく行動課題を組み合わせ、動的な環境下において個人がフィードバックにどのように反応し、行動を調整するかを調査しています。

主な研究に加え、アルツハイマー病、うつ病、および関連する神経精神疾患における神経生物学的メカニズムを検証する、トランスレーショナルアプローチとシステムレベルアプローチに重点を置いた、幅広い学際的研究にも貢献してきました。

APUでは、この研究を価値に基づく意思決定へと発展させ、特にドーパミン系がサunkコスト効果（埋没費用）などの経済的バイアスにどのように寄与するかに着目する予定です。最近、ドーパミン受容体操作とtDCSという新たな組み合わせを用いてこの現象を研究するため、科研費スタートアップ助成金に応募しました。これは、強化学習に関する私の以前の研究を基にしており、神経科学と財務意思決定を結び付ける新しい学際的な方向性を切り開きます。

メッセージ

APU学部生へ

成績は重要ですが、それだけが全てではありません。大学は、直接的な成果やキャリアの根拠を必要とせず、純粋に学びのために様々な考えを探究できる、人生で数少ない時期の一つです。この4年間を、知的なリスクを負って、専攻分野以外の分野に挑戦し、自分の思い込みを揺さぶる機会として活用しましょう。

APU大学院生へ

学問の旅路のこの段階になると、自分が本当に何に興味があるのかがはっきりしてくるでしょう。この機会を活用して、同じ興味を持つ教員と積極的に交流し、質問し、専門知識を深める機会を探しましょう。

APU志望受験生へ

APUの多文化環境は誰もが口にするところですが、キャンパスライフがどれほど楽しいものになるかは見落とされがちです。APUは美しい自然に囲まれていて、学生や教員はとても温かい雰囲気を受け入れてくれるでしょう。

自己紹介

ポーランド出身のマズル・ミハウです。現在、APUの教育開発・学修支援センター（EDLSC）で助教を務めています。クラクフ教育大学で言語と文学の教育学修士号を取得後、北海道大学大学院で情報科学の博士号を取得し、自然言語処理を専門としてきました。日本には15年以上在住しており、これまで教育・コミュニケーション・異文化交流といった諸分野の交差点に立つような仕事をしてきました。APUに来る前は北海道大学で、ファカルティ・ディベロップメント（FD）や国際教育に携わり、EMI（英語で行う教育）やインクルーシブな教育実践、異文化理解に関するプログラムを設計していました。

仕事以外では、ハイキングや日本の何気ない日常の魅力を探るのが好きです。また、28年以上続けているゲームジャーナリズムも、私の大切な創作活動の一つです。



教育開発・学修支援センター
MAZUR Michal Maciej 助教

研究内容

私の研究は、「教育を通じてどのように異文化理解力とグローバルな実践力を育てるか」という課題を中心に展開してきました。具体的には、異文化コミュニケーション、グローバル・リーダーシップ教育、そして教員の専門能力開発が主なテーマです。特にEMI環境におけるカリキュラムの革新に注目し、教室内での振り返り活動、学生からのフィードバック、そしてゲームやeラーニングなどテクノロジーを活用した教育方法が、いかにインクルーシブな教育を支えるかを探究しています。また、言語使用の分析に、自然言語処理の知見を活かしつつ、実際の授業現場での気づきから理論と実践を橋渡しする研究を行っています。研究コミュニティづくりのため、最近では、教育における生成AIや多言語環境における言語選択の研究について学会発表も行っています。

異文化コミュニケーション、デジタルメディア（特にゲーム研究）、そしてグローバル教育に関心がある方は、ぜひお気軽にお声かけください。教育やメディアを通じて社会にポジティブな影響を与えたい学生の支援にも力を入れています。一緒に新しいアイデアを考えたり、コラボの機会を探したりできたら嬉しいです。

メッセージ

APU学部生へ

大学生活は授業や課題だけではありません。自分自身と出会い、世界との関わり方を考える大切な時間でもあります。APUには、世界中からいろいろな興味深い背景を持つ仲間が集まっています。ぜひ一歩踏み出して、初めての相手に話しかけたり、知らないクラブに参加したり、「こんなこと聞いていいのかな？」という質問もしてみてください。好奇心旺盛に、そして大胆になり、そして成長するときです。最も意義深い経験とは、これまでの枠組みから一歩踏み出すということから始まります。APUには、挑戦と発見のチャンスが溢れています。それをぜひ自分のものにしてください。

APU大学院生へ

大学院とは、専門性を深めること、つまり専門分野への自分の考え方を研ぎすまし、見識を育てるための場所です。同時に自らの知識に挑戦し、複雑な考えを分かりやすく伝える力を磨くときでもあります。教員と積極的につながり、異分野の仲間と交流し、自分の目標を定期的に見つめ直してみてください。研究はテーマそのものだけでなく、「研究を通じて自分がどう成長するか」も非常に重要です。

APU志望受験生へ

APUでの国際的な学びは、ただ学ぶだけではなく「生きる」体験でもあります。「人間」に興味をひかれる人、多文化に強い関心を持つ人、多様な視点から世界を見てみたい人にとって、APUは自己の成長や変革に役立つきわめて刺激的な場所です。あなたの「らしさ」、好奇心や冒険心を持って、ぜひ飛び込んでみてください。これからの世界では、未来のあなたのような素養を持ち、違いを超えてつながる力を持つ人が求められているのです。



研究論文のご紹介



Saunders, M., & Takeuchi, O. (2025). Exploring perspectives of language advisors and advisees about language advisors' roles in a Japanese university context. Studies in Self-Access Learning Journal, 16(2), 342-359.

著者：サンダース 美里（言語教育センター 嘱託講師）

英語を担当し、言語自主学习センター（SALC）では言語アドバイザー（LA）も務めています。関西大学院修士課程では、LAの役割に関する研究を行い、「省察的な対話」によって学習者が自律的に成長する姿を目の当たりにしました。現在は同大学院の博士後期課程にて対話を通じた関係性の構築や言語教員のwell-beingに関して研究しています。

論文の概要

言語自主学习センター（SALC）の言語アドバイザー（LA）の役割は多面的であり、教師や、メンター、コーチとも重なるところがあります。本研究では、Thompson (2017)のコーチング・インパクトモデルを用い、ある日本の大学におけるLAと学習相談者の双方へのインタビューを通して役割認識を質的に探りました。その結果、学習者の自律性の向上に伴い、LAに対する役割認識も変化し、LAが状況に応じてアドバイザー、教師、メンター、コーチの役割を柔軟に行き来する必要性が示唆されました。

APU教職員や学生・院生へのメッセージ

私たち教職員は、対話を通じて学生と学びの方向性を一緒に見つけ、自分の学習に責任を持ち、意味付けしながら選択できる「自律的な学習者」への変容を促し、そして将来にわたって学び続ける「生涯学習者」への成長を支援しています。言語学習は独りではなく、周囲との関わりの中で育まれるものです。学びや喜びや悩みを分かち合いながら、共に成長していきましょう。

Community of Advising Practice(CAP)のご案内

CAPは、SALCの言語アドバイザー（LA）を中心に、2024年に始まりました。現在、APUと立命館の教職員合わせて約20名が参加しており、毎月第2火曜日の夜8:30-9:30にZoomにて開催しています。このコミュニティでは、学生との対話を円滑にし、自律的な学びを促すための対話のスキルやツールを、実践を通して学んでいます。ご質問や参加希望のご連絡は、私 misato@apu.ac.jpまでご連絡ください。